

古鈔本。

以上、未見のものも多いが、従来自筆本と称されてきたもの、たとえば三原市立図書館本などは詳細に見ると、序、奥書、各巻首の書題・署名までが道三自筆で、本文は書体は酷似するが別人の手によるものようである（自筆本の臨模か）。道三のもとで学業を終えた門人に自ら序跋等を揮毫して授与するならわしであったのだろう。印刷医書の行われない時代ならではの美風である。今後さらに多くの実見を重ねたいと考えている。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室）

松下見林とその師古林見宜

岡田安弘

松下見林に就いては既に識られている通り、医家としてよりも日本歴史上の貢献の大きい史家・神道家として有名であるというべきであろう。もしこの人が居なかったならば、今日の日本古代史の隆盛はなかったと言われる。それはその著書『異稱日本伝』のためで、見林が人を長崎へ派して購求した漢籍は、本書に引用されているだけで百三十種に上る。今日誰にでも引用されている書物——山海経・後漢書・魏志・史記・晋書・隋書・新唐書・旧唐書・太平御覧・三國史記等は総てこの中に含まれる。当時の日清韓三国間の文物交流の薄さから考えると驚くべきことと言わなくてはならない。

見林は河内の人で、自ら楠氏の子孫と称している。尊皇

家としての神道関係著書が多いが、『異稱日本伝』に次ぐ第二の重要著書に『前王廟陵記』上・下がある。これは蒲生君平の『山陵志』の先駆となるものである。

見林の師を古林見宜（ふるばやしけんぎ）といい、浪華の医家として有名な人である。播磨の赤松氏の流れを汲み、曲直瀬正純の門に入ったが、後に独立した古林流を起した。後水尾天皇を診療したこともあり、沢庵に医術を教授した。黒田侯・所司代板倉侯の知遇を得、多くの門弟を養成し、独自の診療法に依って名医の誉れが高かった。その子孫は数代に亘って名声が高く今日に到っている。

見宜の妻佐谷氏の檀那寺の天与上人と松下家とが遠縁に当り、上人の世話で見林が見宜の門下に入ったという。見宜は見林の才能を見抜いてよく教導した。特に日本の古典籍を読むことを薦めた。このことが後に見林の日本史への興味と関心に繋がったとすると、軽視できない事実である。見宜自身が『古事記』・『日本書紀』・『本朝文粹』などをよく読んでいたらしい。こうしたことは総て見林の著『見宜翁医按』に記載されている。見宜に教わった医術で見林は大流行医になり又殖財の才もあったとみえて巨富を

成した。昔から医家にして財を成した者は極めて多いが、富を蓄えるだけでは全く意味がなく、如何様に消費するかが功罪の分かれ目である。見林はその富で大量の書籍を買ったのである。且つその師見立の名声を後世に残したのも『見宜翁医按』一書に依る。即ち師に依って門下生は起り、門下生に依って師は現われるのである。

見宜の墓碑は大阪中寺の禅林寺に、見林のそれは京都七本松出水下ルの大雄寺にある。古林家及び大雄寺に所蔵されている寿像・史料を供覧する。

（京都医学史研究会）

スレニ、同日、同録、
ニ載ル、ト、本日拾不